

高鷺の民謡を紹介（2）

小学館発行の国語大辞典『言泉』によると、民謡とは「民衆の共同体による労働・儀礼などの集団の場において、そこに参加した共同体の成員の間から生まれる歌。農村の田植え歌・米搗き歌・麦搗き歌・草取り歌・茶摘み歌・機織り歌・馬子唄・漁村の舟歌・大漁節・新築・婚礼長寿を祝う祝賀歌・神事・祭礼などで歌うもの明治以降は詩人などによって制作されたものも含むもある。」と記してある。そこで高鷺村史の中に紹介されている『民謡』について第2部として紹介しました。

【よいよい】

わじま節は調子が軽快なのに対して「よいよい」はのどかで大変のんびりしています。わじま節は名のとおり北陸地方から伝わったものですが、「よいよい」は郡上地方が起源だと言われ、古くから苗取り、草刈り、桑とり等で歌われた。歌詞はわじま節と同じく次のよう七七七五調のものなら何れも適しています。

“ハァー ヨイヨイ ヨイヨイ 桑も良うさけお蚕もよかれ、糸ひきヨ、ヨー若い糸ひきヨ頼まずね”

【こだいじん】

この唄は飛騨の白川方面から来たものだが、当地方でも古くから野性味豊かな振りに合わせて宴席などに用いられた。

“器量がヨー よいとて けんたい振りやおきやれ、み山奥山 その奥山の、岩に咲いた千重のつつじ、なんぼ器量がよく咲いたとて、人が手出さにやそのまま一果てるサーノ エー、ヤッテクリョ ヤッテクリョ

おらが背戸のしよろしよろ川に、むかしやじゃがすむ今亀が住む、亀にや亀じゃが人取る亀よ、きのうも四たりとった今日も五人とりやった。こやにとつてくれりや人のたねや絶えるサーノエー

おらが在所のあっちよ向いた山に、石できざんだお地蔵さんがござる。月に一度のご開帳がござる、男まいればあっちよい向いてござる、女まいればこっちょ向いてござる、とかくあの地蔵いろ地蔵様よサーノエイ”

【いせおんど】

いせおんどは、伊勢が本元で近隣各県のものもほとんど大差がないようである。高鷺では婚礼披露の宴席にはなくてはならないものになっている。

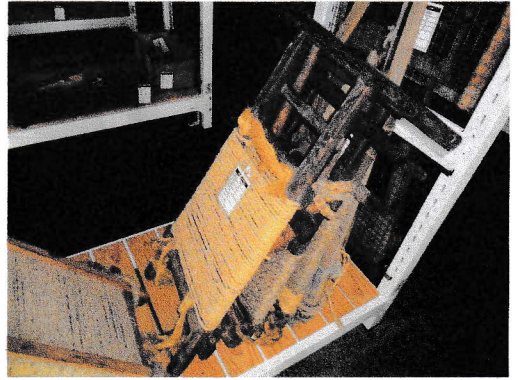
“アヨーナイセイ伊勢は津でもつヨイヨイ、津は伊勢で持つ、ヨオイセソコセ、尾張りヨ一名古屋はソーレサ、城でもつ、ヨーイヤナーヤートコセ、アリヤリヤノコレワイセ、ササナンデモセー”

高鷺の民具を紹介（2）

『会報 高鷺の文化財』第96号で提案しましたように、高鷺開拓記念館には第94号で紹介しました民具以上に数多くの民具が村民の皆様から御寄贈・寄託していただきました。さらに会員の皆様にはどのような民具を所蔵しているかを知っていただく為に、ここに民具の一部を紹介します。

せいた

背中にしょって荷物を運ぶ道具。
山で荷物を運ぶときや農作業の時にも用いていた。



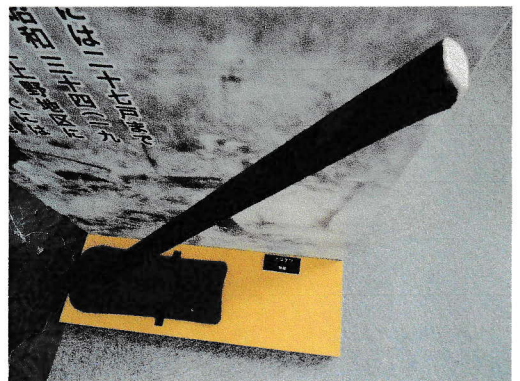
蚕あみ (えあみ)

かいこ棚の桑の葉の上に掛けておくもの。
葉を食べ終わった蚕は、ここを上がってくるので、
下に敷いてある栈の掃除がしやすい。



くろくわ

黒鍬は通常の鍬より刃が厚くて幅が広く、刃と柄の角度が 60 ～ 80 度を開いている。さらに、柄が太く短くできていることで力を加えやすく、打ち下ろした時に深く土に食い込むようにできている鍬の事である。もともとは尾張の大野鍛冶が作っていた柄を黒く塗った土木作業用の特殊な鍬だったが、開墾用の打ち鍬として広く普及した。別名「たち鍬」とも呼ばれ、田の土をすくい上げ、畔に塗りつける作業に向くことから畔鍬とも表記する。



いっぽんぞり

雪国の高鷺では昔はもっと積雪量が多く、橇は移動の手段や運搬用具として必需品であった。その手作りの橇も子ども達にとっては格好の遊び道具で、冬を待ちかねたように、一本橇や二本橇で雪の野山を滑って遊んだ。

